

令和六年度

滝川第二中学校 入学考査 問題

C日程

国語

(四十分・百点)

注意事項

- 1 問題は1ページから14ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内わくないに記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督かんとくの先生の指示に従いなさい。

受験番号				氏名	
		—			

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号ふごうもそれぞれ一字としてふくみます。)

ごくたまにですが、私の授業後のコメントに、人生で起きたことについての「うらみつらみ」をびっしりと書いてくる学生がいます。ただしこの時「すみませんが書かせてください」と遠慮えんりょの言葉で始められていたり、「ありがとうございます」といった感謝の言葉で締めくくられていたりします。ここからは、自分が抱かかえているうらみを話すのは相手にとっては（I）ことだと彼らかれが考えていることがわかります。さらに、「これは誰だれにも話したことはありません」と書かれている時もあります。ここからは、若者たちはうらみをひとりで抱こえ込んでいることがわかります。

私が読んできた限りのうらみでは、若者側に落ち度はなく、彼らは純粋じゆんすいな被害者ひがいしやだと思われるケースばかりでした。(中略)それでも、彼らはそれを誰かに訴うったえることなく、ひとりで抱こえ込んでいます。

おそらく、「仕方ないよ」とか、「もう昔のことじゃん」とか、「怒おこるだけ損」とか、「重い」などの言葉がこの社会に満ちてい

ることを、彼らはすでに知っているのでしょう。実際に、誰かに直接言われたことがある人もいるかもしれません。

だから、もう言わない。

今の社会環境かんきやうは、何かの被害にあっても、何事もなかったかのように振舞ふるまわないと余計にひどい目にあう状況じやうきやうに満ちています。①被害を伝えると非難されたり差別されたりすることすらあります。

つまり、「うらみ」や「許せない」思い、「つらさ」や「苦しさ」などのネガティブをなきものとしようとする社会のなかを私たちは生きているのです。その痛みは確かにそこにあるのに、その思いは否認ひにんされ無視され非難されます。

もちろん、感情には他者に向けて表出されるべきではないものがあります。それは他者を害するものです。他者を害する感情をコントロールするのは、他者への配慮という社会性です。

(A)、アンガー・マネジメントという言葉があります。これは怒いかりをコントロールすることです。そして、怒りのコントロールという「怒り」に注目してしまいがちです。でも、「怒り」自体は悪いものではありません。それは必然性があつて私たちの心に立ち現れてきます。しかも、怒りは社会生活を送るため

に必要な感情です。怒りの感情を失ってしまえば、守るべきものも守れません。怒って、自分を守れ。怒って、誰かを守れ。

【 X 】

こう考えていくと、アンガー・マネジメントで目指されるべきことは、怒りの抑圧よくあつなどではなく、自らの感情によって周囲の人を害さないという社会性しゃかいせいを身につける点にあることが明確になります。

他方で、何かの被害にあったり、理不尽りふじんなことをされれば腹が立ち、つらくなるのは健康的な反応です。それは、ひとりで抱え込むのではなく、誰かに受けとめられていくとよいのです。つらい時に他者に助けを求めるのは、他者への信頼しんらいという社会性です。気持ちを受けとめてもらえる環境で過ごせば、私たちは他者を配慮しつつ他者を信頼し、助けたり助けられたりして生きていきます。

ですが、気持ちを受けとめてくれる大人がいない環境で育ったり、気持ちを否定され続けてしまったりすれば、他者への配慮ができなくなると他者を害あがするか、他者への信頼が育たずにネガティブをすべて自分のなかに抑え込んで自分おのを害あがするか、どちらかに偏かたよっていつてしまいます。

私はこれまでの調査研究のなかで、犯罪者ふくを含めて他者を害してしまうタイプの人から話を聞く機会がずいぶんありました。その時、犯おかした罪についても、なぜ、どうして、どのように行ったのか聞きました。そこには外からだけではわからない事情と、時にはとても悲しい背景がありました。

他方で、日常的な場面あつとうで圧倒的に多いのは、学生を含めて自分を害してしまうタイプの人との関わりです。そこでここからは少し、自分を害してしまうケースをみていきたいと思います。

ある六月の夕暮れ、家の近所の踏切ふみきりで遮断機しゃだんきが上がるのを待っていた時に、急にムクムクと腹が立ってきました。その前の月に起きたことを、私は思い出したのでした。

私の理性は「たいしたことないじゃない」とか「別に、何かを失ったわけでもないし」とまったく怒っていません。そんなことより、晩ごはんのメニューでも考えたいところです。だいたいスーパーマーケットでお買い物をした帰り道でしたから。② そんな私の思いとは裏腹に、体の方は腹を立てています。理性を飛び越えて体が勝手に怒っています。

それでその時、私は③ 自分を斜め上ななの方から冷静なまに眺めつつ、

「うん。今、症状が出ているんだな」と思うことにしました。そうして、数本の電車がガタンゴトンと目の前を通過していき、遮断機が上がると、頭は怒っていないのに体が怒っている分裂状態のまま踏切を渡りました。

「怒っても仕方ない」。「怒るだけ損」。「怒りを手放す」。^④ こうした言葉は聞いたことがあると思います。そう書いてある本も世の中にはたくさんありますから。でも、そんなことは^⑤ とつくにわかっている場合も多いのではないのでしょうか。さらにいえば、踏切前の私のように、理性ではまったく怒っていないのに、体に怒りの反応がすることすらあるわけです。

^⑥ こういうことを過去にも何度か経験して、私はつらさや悲しみ、怒りや許せない気持ち、あるいはその他さまざまな感情を、ある種の「^⑦ 症状」と見なすようになりました。「私が腹を立てる」のではなく、「腹が立つ」という症状が、一定期間、私に発生する」といったところです。私が能動的に怒っているのではなく、いわば怒るという状態に（Ⅱ）に巻き込まれている状態です。

嫌な出来事が起きるとこうした症状が生まれ、苦しみます。（Ⅲ）^B、症状は時間とともに緩和していきます。風邪でいつか高熱が出てても次第に下がっていくのと同じです。

熱が出ている時、体のなかでは免疫細胞がウイルスと闘ってくれています。悪いモノをやっつけてくれています。こんなふうにながタイプを「症状」としてとらえると、たとえば、私の体は私を守るために怒ってくれていることがわかってきます。（Ⅲ）^C、熱が出ている時に、「熱を出しても仕方ない」、「熱を出さずだけ損」、「熱を手放す」と言われても、そんなことは無理だということがよくわかります。（Ⅲ）^D、しっかりと熱が出ないと困ってしまいます。熱が出ているならば体を休めたり水分をとったりといった対処も必要です。

こんな話をするのは、私自身が長年、怒ることはよくないことだと単純に思い込んできたからです。あれやこれや理由をつけては「怒っても仕方ないじゃないか」と自分を説得し、^⑧ その感情をなかつたこととし、さっさと蓋をしようとしてきたからです。偉人や聖人の本を大量に読み、怒りにとられる自分の未熟さを責めたこともあります。

ですが、私のために怒ってくれている体、怒りを表現している体こそが私の味方でした。その味方を敵にまわして、自分自身に寄り添えていなかったのは理性の私、この私自身でした。

時と場所をわきまえずに感情を暴発させるのは（Ⅲ）^Ⅲ がな

く問題ですが、自分で自分の感情を消し去ろうとするのは自己否認です。

こうして、誰よりも私自身が私の味方になれていなかったことがわかったのです。誰よりも私に二次被害をあたえていたのは、私でした。

「そんなことで怒っても仕方ないじゃん」、「もう終わったことだし」、「自分にだって落ち度はあったじゃない」、「世の中そういうもの」、「自分の感じ方がおかしいんじゃない?」、「まだこだわってるの?」、「我慢、我慢」。

こんなふうには、私たちは自分の心のなかで、(Ⅳ)をなきものとしようとします。

怒りやつらさを誰かに話せば二次被害にあい、自分で自分にも二次被害をあたえてしまう。すると、私たちの怒りや悲しみは、行き場をなくします。でも、感情は何か理由があつてそこにあるのだし、そもそも理由がないままそこにあつたとしても別にいいわけです。

(中村英代なかむらひでよ「嫌な気持ちになつたら、どうする?」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。)

問一 (A) (D) に入ることばとして適当なものを、次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じものは二度選べません。)

ア それでも イ たとえば ウ むしろ
エ なぜなら オ すると

問二 (I) に入ることばとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア おそろしい イ 迷惑めいわくな ウ 稀有けうな エ うれしい

問三 ——線部①「被害を伝えると非難されたり差別されたりすること」を指すことばを本文中から漢字四字で書きぬきなさい。

問四 【 X 】に入る文として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア お互^{たが}いの怒りを認め合うことで、許し合う心が生まれるのではないでしょうか。

イ 何かを「守る」ということには、たゆまざる節制と忍耐^{にんたい}が必要なのです。

ウ 私たちが怒りを失えば、ズルい人、悪い人にやりたい放題やられるだけです。

エ 怒りというのは、自分の幸福を最大限に実現するための、有効な手段なのです。

問五 ——線部②「そんな私の思い」とありますが、ここでの「思い」とはほぼ同じ意味で使われていることばを、本文中から二字で書きぬきなさい。

問六 ——線部③「自分を斜め上の方から冷静に眺めつつ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いと体の反応の食い違い^{ちが}の統合を図りつつ

イ 自分の体の不合理な反応を情けないと自覚しつつ

ウ 自分の思いと体の反応の食い違いを客観視しつつ

エ 封じ込め^{ふう}ていた自分の思いを改めて再確認しつつ

問七 ——線部④「こうした言葉は聞いたことがあると思います。そう書いてある本も世の中にはたくさんありますから」には何という表現技法が使われていますか。漢字三字で答えなさい。

問八 —— 線部⑤ 「と、つく、に、わか、つ、て、い、る」には筆者による傍点^{ぼうてん}

が付されて強調されていますが、その目的として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「怒り」が生産的な感情ではないとわかっていても、だからといって怒りを抑えられるものではないことを強調するため。

イ 「怒り」が抑制するべき存在であることは、多くの本に書いているが、その内容に疑いをもっている人も多く存在することを強調するため。

ウ 「怒り」の弊害^{へいがい}を筆者は熟知しており、本を読むまでもなく、それを抑える方法を十分に知っていることを強調するため。

エ 「怒り」は自然な反応であり、その感情を抑えるのは、本に書いてある通り本当はよくないことであることを強調するため。

問九 —— 線部⑥ 「こういうこと」とはどういうことですか。そ

の説明としてふさわしい部分を、「～こと。」につながるように、本文中から二十字以内で書きぬきなさい。

【 ～こと。 】

問十 —— 線部⑦ 「症状」とはどういうものですか。その説明と

して最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 治療^{ちりょう}をすることで、その苦しみを速^{すみ}やかに抑えるべき反応。

イ 理性とは関係のない、ストレスから自分を守るための体の自然な反応。

ウ 心の病によって一定の期間をあけて、くりかえし発生する苦しい反応。

エ 病原菌^{びょうげんきん}やウイルスを排除^{はいじょ}するための、健康を保つのに必要な免疫反応。

問十一 (Ⅱ) には、(Ⅱ) をふくむ一文の前半にあることばの対義語が入ります。あてはまる漢字三字を考えて答えなさい。

問十二 ——線部⑧の「その感情」とは何を指しますか。本文中から四字で書きぬきなさい。

問十三 (Ⅲ) に入ることばを、本文中から漢字三字で書きぬきなさい。

問十四 (Ⅳ) に入るカタカナのことばを本文中から書きぬきなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。)

「あれ？」

クラスメートの木村さんが弁当を (A) のぞくので、芽以は怪訝な気持ちで顔を上げた。木村さんとは休み時間にときどき雑談くらいはするが、特別仲がいいわけではない。

「え、何？」

あ、ちよつと待って、と言いながら、木村さんはスマートフォン液晶画面をスクロールしている。

「あー、やっぱそうだ、ぜったいこれだよー！ だってだって、弁当箱おんなじだし、その果物入ってるタッパーも同じだし！」

木村さんが画面を芽以の前に差し出した。そこにはお弁当の画像があった。楕円の曲げわっぱに、半分は色とりどりのおかず、半分は白いご飯。ご飯の真ん中に梅干しが一つ鎮座している。おかずは唐揚げと卵焼きと茹でたブロッコリーとミニトマト。別的小さいタッパーにパイナップルが入っている。なんのへんてつもない弁当である。

(B)、それを見た瞬間、^①芽以は青ざめた。まぎれもな

く、父親が自分のためにいつか作ってくれた弁当だったのだ。

「何、^②これ……」

芽以は声を絞り出すと、木村さんの手からスマートフォンを奪い取り、その写真が掲載されているブログを、ぐんぐんスクロールしていった。

次から次へと、自分がかつて食べたお弁当が現れる。記憶の底で溶けて消えかかっていたそれらが、まざまざと蘇^{よみがえ}ってくる。

まぎれもなく、自分の弁当だ、と芽以は思った。お父さんが毎朝作って自分に渡してくれた、弁当。

「私のだ……」

芽以がつぶやくと、木村さんの目が輝^{かがや}いた。

「でしょう？ やっぱ、星崎さんのだよ！ わー、すごい！ 本人目の前にいたんじゃない！ てか、星崎さん、これ知らなかったの？」

「……知らなかった」

芽以がぼつりと答えた小さな声にかぶせるように、え、なになに、見せてー、と女子たちがまわりに集まってきた。

「これ、けっこう人気なんだよ、一回、ネットニュースにもなってる。だから知ってて、ずっと追いかけてただけだよ」

ブログのタイトルは「愛娘^{まなむすめ}のための今日もがんばる親父^{おやじ}弁当」だった。シングルファーザーの「親父」ががんばって作る、という[※]コンセプトで、娘のための毎日の弁当を披露^{ひろう}している。キャラ弁のような派手さはないが、素朴^{そぼく}で親しみやすく、思春期の娘のための弁当を父親が作っているという点で注目を浴び、じわじわとファンが増えていっているらしい。

「今日の半熟卵は水から火にかけてきっかり8分！」「ごま油が茄子^{なす}を甘く^{あま}してくれる」といった役立つ一言コメントも人気を後押^{あとお}しているようだ。

「これ、星崎さんのお父さんのブログだったんだ!？」

「お父さんが作るってえらくない？ うちのお父さんなんて、林檎^{りんご}の皮も剥^むけないんだよ」

「いいなあ、おいしそう」

「すごいちゃんとしてる。星崎さん、愛されてる」

自分の平凡^{へいげん}な弁当に突然^{とつぜん}クラス中の注目が集まり、芽以は大いに戸惑^{とまど}ったが、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「星崎さんのお父さん、ずっとシングルファーザーでがんばってるんだ……」

誰かがぼつりとつぶやいたセリフが、騒^{さわ}いでいたクラスメイト

たちを一瞬にして、しん、とさせた。ブログのタイトルの下には、「娘が一歳二ヶ月のとき、妻は虹の橋を渡りました。妻が空で安心できるように、親父は今日もがんばります！」という文章が添えられていた。

「芽以の家、そうだったんだ……」

同じ卓球部で仲良くしている未奈美がしんみりした声で言った。

「あ、うん、そう」

芽以は答えながら、食べていた弁当の蓋をぱたりと閉じた。

「別に、秘密にしてたってわけじゃないよ。でも、わざわざさ、言う必要もないかなーって、ははは」

「ないかなー」のところを身体を斜めに傾けて、^③ポップに答

えて笑ってみせたつもりだったが、誰も笑わなかった。芽以は、^④脇の下に変な汗が滲むのを感じた。

父親が毎日食事を作ってくれることは、物心ついてから（C）そうだったので、特別だと思っただけのことではない。高校一年の今のクラスメートには、自分の家が父子家庭であることは特に伝えていなかった。

母親が幼い子どもを残して死んでしまったことを知っている人

たちの間で、^⑤微妙な気遣いのような空気が生まれる。それは、芽以をいつも憂鬱な気分にした。母親が死んでしまったかわいそうな子ども、という認識のもたらす、なんとなく腫れ物にさわるような重い空気とよそよそしさ。あるいは逆に生まれる妙ななれなれしさ。そして、遠くで自分を指さしながら言われる、「あの子、お母さんが死んじゃったんだって、かわいそう」というささやき。聞きたくもないのに、なぜかそのセリフは、すぐそばでささやかれたように無遠慮に耳にしのびこんできて、胸に刺さった。「かわいそう」という言葉は、その言葉をはっきりと理解することができなかった頃から、芽以は雨のように浴びてきた。正確な意味は分からなくても、自分が特別扱いられている居心地の悪さは感じていた。

こっちが子どもで言い返せないからって、なんでも言っていると思うんじゃないよ、と、その頃のまわりの大人たちの様子を思い出している、芽以は腹を立てていた。保育園でも、小学校でも、中学校でも、「あの子のお母さん、死んじゃったんだって」がつきまとい続けることに、^⑥心底うんざりしていた。だから、地元の子が誰も行かないような少し遠くの高校に（D）進学したのだ。自分のことを誰も知らない場所に身を置くことができて、芽

以は心からほっとした。こちらから口に出さない限り、誰も親のことなど話題にしない。自分は、ありきたりの、どこにでもいる、「まあまあ」な女子高生でいることができるのだ。そのことが、何より安らぎになった。

なのに、今、^⑦それが崩れた。父親の、弁当プログラムのせいで。ふっと足元が揺らぐような感覚に襲われた。

自分が話題の発端を作って気まずい空気にさせてしまったことに責任を感じたのか、木村さんが「ま、まあ、あれだよねえ」と高めの声を出した。

「照れくさいとは思うけどさ、星崎さんもうれしいよね、こんだけ愛されてるのがわか……」

「こんなの！」

木村さんの言葉を断ち切るように、芽以は大きな声を出した。

「うれしくない！ 迷惑なだけ！」

^⑧自分でも、言うてはいけないことを言ってる、と思った。でも、止まらなかった。

「こんなの、どこがすごいのか？ 全部、全部別に、普通じゃん、普通の弁当じゃん。これ、お母さんが作ったお弁当だったら、誰もなんにも言わないよね。なんで父親が作ると、みんなおもしろ

がるの？ すごいつてなるの？ お母さんが死んでるから？ ねえ、なんで？」

「芽以、やめなよ！」

未奈美が芽以の肩に手を置いてその言葉を遮った。芽以は、はっと我に返った。

ごめん、と誰にも聞こえないような小さな声で芽以はつぶやいてから、机の上の弁当箱を乱暴につかんでリュックサックに投げ入れた。そしてリュックサックのストラップを片方だけ引っかけて、教室を飛び出した。

(東直子「ひとつこひとり」より。なお、作問の都合上、一部変更してあります。)

注 コンセプト：基本的な構想・方針。

問一 (A) (D) に入ることばとして適当なものを、

次のア～カから選び、記号で答えなさい。(同じものは二度選べません。)

ア	あるいは	イ	めったに	ウ	ずっと
エ	しげしげと	オ	だが	カ	あえて

問二 —— 線部①「芽以は青ざめた」とありますが、なぜですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分が母親を亡くしていたことがばれてしまったと思ったから。

イ 父親が自分を利用して人気を得るのは裏切り行為だと感じたから。

ウ 自分の弁当が知らないうちに公開されていることに驚いたから。

エ 自分の弁当を自慢していると友人たちに思われたくないから。

問三 —— 線部②「これ」とは何ですか。本文中のことばを使って、三十字以内で書きなさい。

問四 —— 線部③「ポップに答えて笑ってみせた」とありますが、なぜですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 元気なふりをしないと、皆が自分に同情してくれて申し訳がないから。

イ 気を張らないと若くして死去した母の無念を思っ泣いてしまうから。

ウ 母がいないために、友人が特別な目で見てくることやだつたから。

エ 父に頼りきり、甘えている、気弱な少女と思われたくないから。

問五 —— 線部④「脇の下に変な汗が滲むのを感じた」とありますが、このときの芽以の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 失望 イ 緊張 ウ 期待

エ 抗議 オ 反省

問六 —— 線部⑤ 「微妙な気遣い」とは何による配慮ですか。それを説明した次の文の「――」に入ることを漢字二字で答えなさい。

母を亡くした子であることへの「――」による配慮。

問七 —— 線部⑥ 「心底」の読みを答えなさい。また、これとほぼ同じ意味で使われていることばを、本文中から三字で書きぬきなさい。

問八 —— 線部⑦ 「それ」の内容を、「くこと。」につながるように、本文中から三十五字で探し、それぞれ最初と最後の五字を書きぬきなさい。

問九 —— 線部⑧ 「自分でも、言っではいけないことを言ってる、と思った」とありますが、なぜですか。その説明として適当なものを、次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 父が男なのに料理に夢中なことに違和感をおぼえているが、それを言う性と性別になるから。

イ せっかく毎日工夫しながら弁当を作ってくれている父の好意を無にすることになるから。

ウ 本来自分のために弁当を作ってくれるはずだった母親が、むしろ悲しむように思えたから。

エ 悪気がなく、父のブログのすばらしさを話題にしてきた友人を責めるような形になるから。

オ ここで動揺すれば、母親を亡くしたのを隠していた自分の不正直さを皆が笑うだろうから。

カ 父が亡き母や自分の不幸を逆手にとって、得意になって弁当を公開するのが許せないから。

三 次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1) ———線部の語と働きが同じものを、それぞれ後のア、エから選び、記号で答えなさい。

① 君きみさえよかったら、日曜にっようにでかけよう。

ア そんなことは幼児ごういにさえわかります。

イ 強風きやうふうに加え、大雨おおいあめさえ降りでした。

ウ 体力たいりきさえあれば、乗り切ることがきでる。

エ 祖母そぼに続き、祖父そふさえ体調たいじょうを崩くずれした。

② このようようなものを食べてはいけませんよ。

ア 山やまのようようなたくさんの贈おくりり物をいただいた。

イ たとえばあめあめのようような菓子かしはありますか。

ウ 晴はれた空そらのようような青色せいしょくの花はなが咲さく。

エ たとえていえば春はるの夜よの夢ゆめのようようなものだ。

③ 私のペットペットは手乗り文鳥ぶんちうだ。

ア すぐめの子こが初めて飛とんだ。

イ まぎれもなくそれは事実じじつだ。

ウ 昨日きのうのできごとできごとはうそのようようだ。

エ 湖うみのほとりほとりはとても静しずかだ。

④ それはコモドオオトカゲの子供こどもらしい。

ア その子こは実に子供こどもらしい表情へいじょうで笑わらった。

イ このパソコンパソコンの機種きしゆはまだあたらしい。

ウ リスリスが餌えきを食べる様子ようすはかわいらしい。

エ アザラシアザラシの背中せなかにあるのはあざらしい。

⑤ 今いまにも水みづがあふれそうそうだ。

ア 昔むかし、ここには城しろがあつたそうそうだ。

イ 明日あしたは大雪おおいゆきが降ふるそうそうだ。

ウ この夏なつはとても暑あつくなりそうそうだ。

エ 川かわの水みづが汚よごれてきてきているそうそうだ。

(2) — 線部の述語に対応する主語を書きぬきなさい。

(例) 大きな魚がここに生息する。↓「魚が」

- ① 昨日、ぼくはねずみが逃げるのを見た。
- ② この夏は、四国において水不足がとても深刻だ。
- ③ 森に住む小人たちも、私が演奏する音楽にあわせて楽しそうにおどりました。
- ④ 実のところ花子さんは汽車が到着する時刻をまったく知らなかった。
- ⑤ たくさんの思い出が残る家を出て、東京で暮らすのは意外にも楽しい。

四 次の — 線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書

きなさい。

- (1) 冷厳な現実に圧倒される。
- (2) チームに残留する。
- (3) 代々伝わる家宝。
- (4) 大臣を護衛する。
- (5) 食料を供給する。
- (6) タオルが水をキュウシユウする。
- (7) 暴風ケイホウが出る。
- (8) 町をサンサクする。
- (9) 姉が銀行にシユウシヨクする。
- (10) 朝晩のカンダン差が大きい。

